

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K13893

研究課題名（和文）南欧諸都市市民ガーデンの包括・系統的研究および日本諸都市への普及にむけて

研究課題名（英文）Comprehensive Research of the Citizen's Gardens on the Cities in Southern Europe and Diffusion towards Japanese Cities

研究代表者

佐倉 弘祐（SAKURA, KOSUKE）

信州大学・学術研究院工学系・助教

研究者番号：90757220

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、南欧先進諸都市と国内の市民ガーデン先進事例を対象に基礎的研究を行い、＜各ガーデンの立地場所の選定（点）、ガーデンと周辺の地域施設・資源との関係（線）、地域内施設・資源とのネットワーク形成（面）＝都市空間的視点＞を分析・整理して、南欧では点と面、国内では線に都市空間的視点の特徴を見出すことができた。また先進事例研究の分析結果を長野市で応用させ、市民ワークショップ、学生の地域密着型PBL授業を通じて、長野市版市民ガーデンを実装させた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

市民ガーデンはドイツをはじめとする西ヨーロッパで研究が盛んである一方で、南欧の市民ガーデンについては研究が少なかった。しかしながら都市空間的視点で南欧の市民ガーデンを研究することで、欧州における南欧の市民ガーデンの特異性を見出すことができた。また調査を通じて南欧の多くの市民ガーデン研究者・活動家と繋がることができ、将来的に国際的な研究グループを立ち上げる構想を抱くことができた。社会的意義としては、研究成果を学会発表にとどめることなく、「世界のまち畑」としてウェブサイトを立ち上げて発信することで、国内外問わず、多くの方へ情報を提供することができた。

研究成果の概要（英文）：This study conducted basic research on the advanced cases of "citizen's gardens" in advanced cities in southern Europe and in Japan, and analyzed and organized "the selection of the location of each garden (point), the relationship between the garden and surrounding local facilities and resources (line), and the formation of networks with local facilities and resources (plane) = urban spatial perspective". The characteristics of the "urban spatial perspective" were found to be points and planes in Southern Europe and lines in Japan. The results of the analysis of advanced case studies were applied to Nagano City, and through citizen workshops and students' community-based PBL classes, a Nagano City version of a "citizen's garden" was implemented.

研究分野：都市空間デザイン

キーワード：市民ガーデン 南欧 都市空間的視点 長野

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

産業革命期の工場労働者の余暇充実、世界大戦中の食料確保など、時代の転換期や不安定な時期に、都市農地は多く建設、研究されてきた歴史を持つ。＜劇的な社会変動期＝リーマンショック以降の経済低迷＋少子高齢化社会＞にある昨今、先進諸国を中心に、安心安全な農作物確保、余暇充実、自然に触れる子育ての再評価など、高度経済成長期に軽視されてきたものへの関心の高まりから、都市農業が再び隆盛している。21世紀の都市農地の中でも、1)劇的な社会変動期により増加傾向の都市内空地を利用し、2)市民主体で建設、維持管理され、3)農地＋αの用途をもつ農地を「市民ガーデン」と呼び、本研究の対象とする。市民ガーデンは、トップダウン型街づくりの限界、都市内空地の増加、地域コミュニティの希薄化などの現代社会が抱える都市諸問題の統括的な解決策として、確立した研究対象になり得る。特に劇的な社会変動期の影響下にある南欧諸国で急増中だが、市民発のため、マスメディアを媒体に各事例の単発的な発信に留まり、包括・系統的研究には至っていない。

2. 研究の目的

我が国では、現在都市農業の大半を生産緑地が占め、生産緑法制定時の最短契約期間(30年間)である2022年に大量に都市農地が駐車場や賃貸住宅に転用される、いわゆる「2022年問題」への対応が喫緊の課題となっている。既存の都市農地を維持するための政策だけでなく、地域ごとに適した多様な市民ガーデンへと空き地を転用することで、都市農地を持続させ、更に先述した都市諸問題の解決へと繋がるのではないだろうか。そのような着眼的から、南欧先進諸都市と国内の市民ガーデン先進事例を対象に基礎的研究を行い、＜各ガーデンの立地場所の選定(点)、ガーデンと周辺の地域施設・資源との関係(線)、地域内施設・資源とのネットワーク形成(面)＝都市空間的視点＞を分析・整理した。また先進事例研究の分析結果を長野市(申請者の勤務地)で応用させ、市民ワークショップ、学生の地域密着型PBL授業を通じて、長野市版市民ガーデンを実装させた。

3. 研究の方法

国内外の先進事例を対象とした基礎的研究においては、まず事前調査として、研究対象都市の市当局公式ウェブサイト、参考文献から、1)市民ガーデン、2)地域資源、3)公共空間・施設の位置データを入手し、GISを用いて地図上にそれらのデータを落とし込む。そして次に研究対象都市を訪問し、1)市民ガーデンとその周辺を現地視察し、事前研究で作成した地図の補足・確認を行い、2)管理者・利用者へのヒアリング調査より、都市空間的視点を把握した。

長野市への応用として、先進事例の調査結果を参考にすることでなく、市民ワークショップ、学生の地域密着型PBL授業も並行して行う。

4. 研究成果

(1) 国外の先進事例を対象とした基礎的研究

スペイン2都市(マドリッド、セビーリャ)、イタリア2都市(トリノ、ローマ)、ポルトガル2都市(リスボン、ポルト)の合計6都市の市民ガーデン調査を実施した。

複数の都市の市民ガーデンを調査することで、ラテン文化圏に共通した市民ガーデンの特徴が存在することが分かった。特に都市空間的視点の中の各ガーデンの立地場所の選定(点)は、都市の地理的境界、社会的境界、経済的境界に存在することを明らかにした。これらの境界に位置する市民ガーデンが社会的弱者のコミュニティ拠点として機能しており、社会情勢の安定を保っている。都市計画において「余白」をどのように配置するべきか、我が国においても重要な知見となり得る。

地域内施設・資源とのネットワーク形成(面)に着目した場合は、その都市が抱える歴史的背景や文化が大きく関与していることも明らかとなった。特にトリノとローマの対比が典型的であった。トリノの市民ガーデンの特徴は、企業の社会貢献にある。大規模な野外アートパークを運営しているBunker's、地元ホームセンターReroy Merlin、総合フードマーケットEatalyなど、コミュニティガーデンと親和性の高い企業が率先して社会貢献のために建設している動きを把握した。トリノは自動車メーカーFiatと共に繁栄と衰退の道を行ってきた歴史があり、現在新たな形で地元企業が地域コミュニティ形成に寄与している一端を明らかにした。一方で、ローマの市民ガーデンの特徴は、都市部の閉鎖的な市民ガーデンと都市周辺部の開放的な市民ガーデンの対比にある。都市部では、市場内の一角、学校の校庭の一角などを利用した近隣住民による小規模な市民ガーデンが多数存在し、企業や教育機関が運営するものが多く閉鎖的になっている。一方で、都市周辺部には、Orti Urbani GarbatellaやHORTINSIEMEなど誰でも入ることのできる開放的で大規模な市民ガーデンが多数存在し、市やNGOが運営するものが多く、EUからの補助金を利用している場合もあり開放的になっている。トリノは企業と共に歩んできた歴史、ローマはイタリア人の閉鎖的なコミュニティを好む性格が反映されており、歴史や文化がイタリアにおける現在の市民ガーデン形成にも強く影響を及ぼしていることを明らかにした。

「世界のまち畑」としてウェブサイトを立ち上げ、調査した南欧の先進事例を、多くの方と共

有することができた。また調査を通じて南欧の多くの市民ガーデン研究者・活動家と繋がること
ができ、将来的に国際的な研究グループを立ち上げる構想を抱くことができた。

(2) 国内の先進事例を対象とした基礎的研究

東京都、千葉県、兵庫県、大阪府の市民ガーデンを調査し、その調査結果を整理・分析して論
文投稿した(佐倉弘祐、磯部聖太、鈴木悠、コミュニティガーデンの空間デザインの決定要因に
関する研究、公益社団法人日本都市計画学会都市計画報告集、No.20、pp.434-437、2022.2)。南
欧市民ガーデンと比較して、日本のコミュニティガーデン(本研究のコミュニティガーデンと同
義)は、ガーデンと周辺の地域施設・資源との関係(線)を考慮した空間が計画されていること
を明らかとした。

(3) 長野市への応用(実践)研究

市民ワークショップを実施して、「まち畑プロジェクト」として実践している3つの市民ガー
デンを参加者に案内し、今後の長野市の空き地のあり方についてディスカッションした。また都
市空間的視点の中で、国内外の基礎的研究で明らかとなった日本の市民ガーデンの特徴の一つ
である「ガーデンと周辺の地域施設・資源との関係(線)」について、長野市の実践中の敷地で
検討して、斜面住宅地に位置していること、単身高齢者が近隣に多く住んでいること、空き家に
隣接していることをポジティブに捉えた設計提案を市民と共に構想して、実現させることがで
きた。この取り組みが評価され、信州SDGsアワード2021長野県知事賞と大学
SDGsACTION!!AWARDS2022自治体(鹿児島県瀬戸内町)賞を受賞することができた。この受賞を
通じて、SDGsという社会課題解決と市民ガーデンが繋がり得るという気づきを得ることができ
た。

(4) 日西市民ガーデンラウンドテーブルとワークショップの実施

最終年度には、サラゴサ(スペイン)で都市スポンジ化に抗する市民ガーデン戦略を実践して
いるPatrizia di Monte氏とIgnacio Gravalos氏を招聘して、市民ガーデンによる都市再編を
テーマにした日西市民ガーデンラウンドテーブルを開催した。また両者をゲストとしたワーク
ショップを長野市の市民ガーデン拠点である「すけるくガーデン」で実施して、地元住民、学生
との交流を図るとともに、竹によるベンチを制作することができた。これが契機となり、ワーク
ショップ前に比べて多くの地域住民が日常的にすけるくガーデンに足を運んで下さるようにな
った。招聘した2名と共著で、『Network education on design and construction methodologies
using existing urban voids in the community. The case of "Machi Hata Project" in Nagano
City, Japan』というタイトルの論文を南米最大の建築系ジャーナルに投稿して、現在査読結果待ち
である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 佐倉弘祐、磯部聖太、鈴木悠	4. 巻 20
2. 論文標題 コミュニティガーデンの空間デザインの決定要因に関する研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 公益社団法人日本都市計画学会都市計画報告集	6. 最初と最後の頁 434-437
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐倉弘祐、須藤悠	4. 巻 19
2. 論文標題 異世代ホームシェアに適した住居評価指標作成に関する研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 公益社団法人日本都市計画学会都市計画報告集	6. 最初と最後の頁 pp.525-528
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐倉弘祐	4. 巻 vol.628
2. 論文標題 空地の立地特性に応じた農的利用 - 長野市「まち畑プロジェクト」を事例に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地域開発	6. 最初と最後の頁 pp.33-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 金子竜太郎、佐倉弘祐
2. 発表標題 人口減少社会における空地の空間特性に関する研究-長野県長野市第一地区を対象として-
3. 学会等名 日本建築学会2020年度大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊藤一生、佐倉弘祐
2. 発表標題 減築による斜面住宅地の居住性と景観の再編に関する基礎的研究 長野市狐池を対象として
3. 学会等名 2019年度日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤一生、佐倉弘祐
2. 発表標題 減築による斜面住宅地の居住性と景観の再編に関する基礎的研究-長野市狐池を対象として-
3. 学会等名 2019年度日本建築学会大会論文
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kosuke Sakura
2. 発表標題 Investigation and Practice on Urban Agriculture in Japan
3. 学会等名 Dialog Circle on Institution of Architecture, San Martin University, Argentina (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 佐倉弘祐 + 佐倉研究室	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Independently published	5. 総ページ数 121
3. 書名 信州大学佐倉研究室プロジェクトブック2022	

1. 著者名 佐倉弘祐 + 佐倉研究室	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Independently published	5. 総ページ数 81
3. 書名 信州大学佐倉研究室プロジェクトブック2021	

1. 著者名 佐倉弘祐	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 1058
3. 書名 世界都市史辞典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>信州大学佐倉研究室公式ホームページ https://shinshu-sakura-labo.com/ 世界のまち畑（信州大学佐倉研究室） https://shinshu-sakura-labo.com/world/</p>

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	<p>アスタブルアガ アドリアン トーレス (Astaburuaga Adrian Torres)</p>		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	計 文浩 (Ji Whenjao)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関